

「学問の方法」

ヴィーコ(著)、上村忠男・佐々木力(訳)

岩波書店 1987年7月16日刊

「教育再生会議」が今年1月に発表した第一次報告書「社会総がかりで教育再生を」を読むと、教育制度に関わる提言が羅列されているだけで、「基礎学力」としてどのような教育を与えるのか、どのような教育方法をとればいいのかといった「教育内容」に関する議論はほとんど見られない。もちろん今後の検討課題として「教育内容の改革」を挙げてはいるが、それも学習指導要領の見直し、理科系離れ防止、英語教育の強化などが挙げられているだけで、総体として義務教育で何を身に着けるのが21世紀に生きていく人間として必要なのかという本質的な議論はなされていないようである。

今回は学問のあり方、そしてそれを極めるためにどのような教育のあり方が望ましいのかを真摯に論じた18世紀初頭のイタリア人学者ヴィーコの議論を紹介したい。

近代ヨーロッパで学問の方法論を最初に打ち立てたのはデカルトの『方法序説』である。そこでは学問の究極の目的は真理の探究にあるとされ、還元主義的、演繹的方法論が推奨された。ヴィーコはデカルトの方法論に正面から批判を加えた最初の人間として記憶されている。デカルトの分析的方法は近代の科学の方向性を決め、素晴らしい成果をあげたことは疑いがない。しかし、デカルトは、歴史、詩学、芸術、法などを軽視することで、人間社会のもつ豊かさや複雑さに目を向けることを拒否した観がある。ヴィーコは古代ギリシャ・ローマの学問の方法を参照しながら、人間は一気に真理にたどり着くことは出来ず、少なくとも常識的に考えて、間違っていないものを選びとる賢慮(ブルーデンス)を身につけるような教育をすべきであると主張している。彼はデカルトによって主導された科学革命の最中であって、揺るぎない信念をもって健全な懐疑論的探求の精神を保持し、科学的還元論の行き過ぎに対峙したのである。

もし今、教育内容を見直すとすれば、ヴィーコを見直し、彼の言説に耳を傾けるべきではないだろうか。実際、本書はヴィーコがナポリ大学で新入生のために行った開講講演に基づいており、学生がバランスのとれた判断のできる人間となるために必要な学問のあり方について深い洞察を加えている。

日本の教育はまず、日本語の持つ豊かな感性や美意識を身につけさせ、弁論術や文章力を磨くこと、そして、人間精神の本性或政治・社会生活における健全で品位あるふるまいについて教えるべきである。外国語や科学技術は有る程度成長してからでも身につけることが可能であろう。